

詩編 107 : 1～3

ルカによる福音書 13 : 22～30

「狭い戸口」

<十字架と復活へ向かいつつ>

今日の最初のところには、「イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。」とあります。イエスさまと弟子たちは、エルサレムへ向かう旅の途中なのです。

イエスさまがエルサレムへ強い決意を持って向かわれたことは、以前、9 : 51にはっきりと語られていました。「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」ここには、「天に上げられる時期が近づくと」とありました。それは、イエスさまが十字架に上げられることであり、死者の中から起き上がられることであり、そして、天に上げられることです。

これは、神さまの救いのご計画です。すべての人の罪を神の御子の十字架の死によって贖い、罪と死に打ち勝ち、すべてを支配し、神の国を実現して下さる。この救いの御業のために、イエスさまは苦痛と嘆きに満ちた道を、前進しておられるところなのです。

今日の所で聖書は、再びこのことを、わたしたちに思い起こさせようとしています。

その道すがら、イエスさまは、「行く先々の町や村を巡って教えられた」とありました。

イエスさまが教えておられたこととは、神の国、神のご支配が実現し、わたしたちが罪と死から解放される、ということです。そのために神さまは、御子イエスさまを遣わされました。そして、その命をわたしたちの罪のために差し出されるのです。だから、それ程までにあなたを愛しておられる、天の父なる神さまの御許に帰ってきなさい。立ち帰りなさい、ということです。

罪の解放の宣言。神さまの恵みのご支配への招き。悔い改めへの招き。それは今、わたしたちが毎週の礼拝で教えられていることでもあります。イエスさまは、弟子たちが、人々が、そしてわたしたちが、この御言葉を聞き、信じ、神さまの招きにお応えすることを願っておられるのです。

<多いか少ないか>

さて、そうしてイエスさまが人々に教えておられる時。ある人がイエスさまに質問をしました。「主よ、救われる者は少ないのでしょうか。」

これは一体、何を聞きたい質問なのでしょう。もし、救われる人が多い、という答えならば、「きっとわたしもそこに入っている、安心だ」と思えるのでしょうか。もし、救われる人が少ない、という答えなら、「わたしは救いに入れるだろうか。不安だ、心配だ」と思

うのでしょうか。あるいは、ここでイエスさまの話を聞いているのは、ユダヤ人、つまり、アブラハムの時から神さまに選ばれたイスラエルの民です。だからその中の人々が、「神さまに選ばれたイスラエルの民であるわたしは、救われるに違いない。でもきっと、神の民ではない多くの者たちは、救われないのでしょうかね」。そんなふうに、自分の救いの特権を確認する思いで、質問したのかも知れません。

これに対して、イエスさまは一同に言われた、とあります。質問をした人に対してだけでなく、周囲にいたすべての人々に。そして、今この御言葉を聞いているわたしたち一同に、語られたのです。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。」

イエスさまは、救われる人が多いのか、少ないのか。そんな全体的なことを客観的に見ている場合ではない。あなた自身が、救いの前でどうするかだ。あなた自身、狭い戸口の前に立っているなら、入るように努めなさい。あなたが、救いの知らせを聞いたなら、入りたい、救われたいと望み、願い、そのためになすべきことをしなさい、と言われたのです。

イエスさまは、救いは、狭い戸口だと言われます。歩いていたら、知らない間に勝手にそこに入っていた、というような、広い、大きな戸口ではないのです。自動ドアでもありません。救いの戸口は、入るために、努力する必要がある戸口なのです。この「努力」という言葉は、競争に勝つために努力する、勝利のために戦う、奮闘する、という意味の言葉です。救いの戸口は、それが狭くても、入ろうと決意をし、そのために熱心に取り組まなくてはならない、そんな戸口なのです。

あなたが、救いに入ろうと願い、決意し、足を踏み出し、そこに来て、入らなければならない。イエスさまは、そうお答えになったのです。

<戸はいつか閉まる>

さらに、25 節以下でイエスさまは、一つのたとえを語られました。それは、この狭い戸口が、家の主人によって閉められる時が来る、ということが語られています。つまり、それは終わりの時が来る、終末の、神さまが裁きを行なわれる日が来る、ということです。

家の主人が戸を閉める。その戸口を開けたり、閉めたりするのは、その家の主人の権限によって行われます。これはまさに、神さまが主権を持って、世の終わりを来たらせ、わたしたちの罪を裁き、有罪か無罪かを決定する、ということを表していると言って良いでしょう。主人が閉めた戸は、外からは決して開けることが出来ません。

だから、戸が開いている間に、早く入らなければならないのです。裁きの日が来てしまっただけからでは、遅いのです。

今日の所では、閉められてしまったら、外に立って戸をたたき、「御主人様、開けてください」と言っても、主人からは「お前たちがどこの者か知らない」という答えが返って来る、と語られています。あなたとわたしは関係ない、と言われるのです。

外に置かれた者は、一所懸命、この主人との関係を主張します。「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです。」わたしたちはあなたと、食卓を囲むほど親しかったじゃないですか。わたしたちは、あなたの教えを聞いていたではありませんか。わたしたちも、こう主張するかも知れません。わたしは聖書を読んだじゃないですか。礼拝に来ていたではないですか。

しかし、主人はこう言うのです。「お前たちがどこの者か知らない。不義を行なう者ども皆わたしから立ち去れ。」

<不義を行なう者ども>

「不義を行なう者ども」。厳しいお言葉です。不義を行なう。それは、どういうことでしょうか。

ここでは、外に立っている者たちは、何か犯罪を犯したとか、不正をしたとか、そういうことは語られていません。ここでは、そういうこの世の犯罪のことを語っているのではないのです。

これは、主人に対して、つまり、神さま、イエスさまに対して行なった不実なこと。正しくないこと。悪のことを語っているのです。それは、神さまの招きにお応えしなかったこと。神さまに従わなかったことです。それこそまさに、神さまに対して、罪を犯すことなのです。

締め出され、外に立っている者たちは、主人に向かって、「あなたの教えを受けた」「あなたの御言葉を聞いた」と言いました。しかしそれならば、彼らはいったい、何を聞いていたのでしょうか。

イエスさまは、父なる神さまの御心を教えて来られました。あなたがたを愛しておられる。あなたがたを憐れんでおられる。神さまから離れて、自己中心に歩み、罪を犯しているあなたたちを、父なる神さまは赦したいと思っておられる。だから今すぐ、神さまの御許に帰ってきなさい。立ち帰りなさい。悔い改めなさい。

イエスさまは、この救いへの招きを、悔い改めの勧めを、ずっと語ってこられたのではなかったでしょうか。イエスさまは、そのわたしたちの救いのために、今エルサレムへ向かい、十字架の苦しみを受けようとしておられるのではないのでしょうか。

これを聞いた者は、わたしたちは、聞いたその時に、罪の赦しを祈り求め、救いを願い、そして、差し出されている恵みを受け取るべきなのです。招きの言葉を聞いたなら、すぐに応えるべきなのです。

もう今、目の前にイエスさまがおられる。今ここに、神さまのご支配がある。今ここに、あなたへの罪の赦しが宣言され、神さまと共に生きる道が用意されている。ここに来なさい。救われなさい。神さまの恵みに与りなさい。

どうして、この招きに応えない道があるのでしょうか。どうして招かれたその時に、戸口の中へ、この恵みの中へ、入ろうとしないのでしょうか。

はっきり言って、わたしたちの罪の状態は、常に一刻を争うような状態なのです。それなのに、いつでも入れるから、後からでもいい、と思っているのでしょうか。自分のコンディションやタイミングがふさわしく整ってからにしよう、とでも思っているのでしょうか。あるいは、もう自分はそこに入っていると思いつ込んでいるのでしょうか。

イエスさまは、今日の前に立っている人々に、わたしたちに、今この時、あなたは自分のなすべきことを見分けなさい。判断しなさい。そう教えてこられたのです。すべての者は皆、悔い改めなければならない。そう教えてこられたのです。神さまは、あなたが帰ってくることを、忍耐し、期待し、ずっと待っておられるのだから、と。

そしてこの戸口は、やがて時が来れば閉められるのです。終わりの日、裁きの日が来るのです。その日がいつなのか、わたしたちには分かりません。だから、わたしたちはその時がいつ来ても良いように、今この時、お招きに応え、罪からの解放の宣言を信じ、救いの恵みを受け取るべきなのです。

<東西南北から>

最初に、イエスさまに質問をした人は、自分はイスラエルの民で、確実に救いに入っている。律法を守っており、決められたことを守っているから、自分は大丈夫に違いない。やはり、そう思っていたかも知れません。

イエスさまは、28節以下でこう言われました。「あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。」

アブラハム、イサク、ヤコブは、イスラエルの民の祖先です。神さまに選ばれた人々です。しかし、彼らもまた、神さまに選ばれ、招かれた時、真剣に祈りつつ、それに自分のすべてを投げ出して、お応えしたのです。自分の歩みをすべて神さまに委ねて、御言葉に信頼して、神さまと共に歩む道へと踏み出したのです。人生のすべてを、神さまのご計画に委ねたのです。その信仰の歩みを、神さまは喜ばれ、祝福されました。神さまは、わたしたちが応答することを求めておられるのです。

そして、彼らを選ばれたのは、彼らだけが、イスラエルの民だけが、救われるためではありませんでした。神さまは、彼らを通して、救いのご計画を実現しようとされたのです。イスラエルの民を通して、救いの御業を行ない、地上のすべての人々を祝福するために、アブラハム、イサク、ヤコブ、そしてイスラエルの民を選ばれたのです。

ですから、29節には、こうあります。「そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。」

イスラエルの民という枠組みを超えて、異邦人も、地の果ての人々も、東から西から、また南から北から来る。神さまの招きに応えた人々が、世界の全地から集められるのです。イスラエルの民に預言されたことが、イエスさまの十字架と復活によって実現し、すべての人

が神の国に招かれるのです。そして、お招きに応え、救いを信じ、神さまと共に歩む者となった一人一人に、神さまが、神の国で宴会の席を用意して下さっている、というのです。

救いの恵みを知っていても。イエスさまの御言葉を聞いていても。神さまの招きを聞いていても。それにお応えし、その救いの恵みを受け入れるのでなければ。神さまの御許に来るのでなければ、戸の外に立ったままなのです。

イスラエルの民は、確かに、すべての民より先に選ばれ、この招きを受けました。しかし、真剣に御言葉を受け止め、神さまに信頼し、お応えするのでなければ、今日の聖書箇所 of 最後にあるように、「後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」ということになるのです。

<狭い戸口に入る>

救いは、わたしたちが応答することを求めています。神さまの呼びかけに対して、ちゃんと神さまの方を向いてお応えし、自分の思いではなく、神さまの思いに従うことを求めています。それが、狭い戸口から入るように努める、ということなのです。

もし招きにお応えせず、悔い改めず、神さまの方を見ようとしなければ。神さまの御許に行かないなら。それは、神さまの愛を無視し、罪の赦しを与えるためのイエスさまの十字架の死と復活を、蔑ろにしているのと同じことなのです。

戸口の外に立っているままでは、神さまから遠く離れて立っているままでは、救いに与ることは出来ません。なぜなら、救いとは、わたしたちが、造り主である神さまと共に生きる、ということだからです。

わたしたちは、救いへの招きを聞いたなら。そして、自分が悔い改めを必要とする罪人であると知ったなら。その御言葉を真剣に受け止め、救いを願い、熱心に祈り求める者になりたいのです。

その時、わたしたちは、イエスさまの十字架と復活によって与えられた、罪の赦しの宣言を、新しい命に生きる恵みを、しっかりと、確かに、受け取ることが出来るのです。

今、戸口は、確かに開いています。救いに招かれているのです。イエスさまの十字架と復活が、救いに至る戸口を開いて下さったのです。わたしたちの罪を拭い去って下さる、イエスさまの十字架と復活こそ、神さまの御許への招きです。

見ているだけでは、聞いているだけではいけません。語られた御言葉を、イエスさまの救いの御業を、自分のために成されたこととして真剣に受け取り、悔い改めつつ、感謝しつつ、神さまの御許に行くべきなのです。

お招きに応え、神さまと共に歩む道は、決して楽ちんとか、波風のない歩みという訳ではないでしょう。世の終わりが来て、イエスさまが神の国を完成させて下さるまでは、わたしたちの地上の歩みは、なお忍耐や戦いを必要とする道なのです。依然として、苦しいことも、

悲しいことも起こります。信仰のために、迫害を受けることもあります。なお罪を重ねてしまうこともあります。わたしたち自身はやはり、弱く、無力で、貧しいでしょう。

しかし、わたし自身が、どんなに小さな、弱い、貧しい者であっても、大いなる力を持っておられる神さまが、わたしの父なる神さまとなって下さるのです。神さまが、わたしに力を与え、新しくして下さるのです。イエスさまの罪の赦しの中で、恵みの中で、命の中で、わたしを決して離さず、捕らえていて下さるのです。

そして、終わりの日の、神の国の食卓を、確かな希望として約束して下さるのです。

信仰は、神さまが与えて下さり、守って下さり、支えて下さるものです。

だからこそ、わたしたちもまた、この神さまを心から信頼し、依り頼み、自分をお委ねしなければなりません。神さまの恵みに、飛び込んでいかななくてはなりません。自分が頼りにして握っているものを手放して、神さまにこそ、神さまにのみ、頼るべきなのです。

神さまが、神の国へ、救いの恵みの中へ、わたしたちを招いておられます。戸口は狭くても、今、確かに開かれています。御言葉が語られ、イエスさまの十字架と復活の救いが示され、悔い改めなさい、ここへ来なさいと。東西南北すべての者が、わたしたち一人一人、すべての者が、招かれています。

神さまは、イエスさまを遣わして、わたしたちを神の国に招待して下さり、宴会の席を用意して、わたしたちが来ることを、忍耐して、期待して、待って下さっているのです。

わたしたちはこのお招きに、感謝をもって、悔い改めをもって、お応えする者になりたいのです。そのような者となることが出来るように、祈り求めています。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、罪に捕らえられているわたしたちを解放し、天の御国に入ることが出来るように、御子であるイエスさまを遣わして下さいました。そして、イエスさまは十字架と復活の御業によって、わたしたちに罪の赦しを得させ、御国への戸を開いて下さいました。

今、わたしたちは、あなたのお招きを聞きました。お応えする者とならせて下さい。

罪の悲惨の中から、滅びの中から、あなたの救いを求め、恵みを求め、御許に近付くことを願わせて下さい。悔い改めて、あなたの御許に立ち帰る者として下さい。

あなたは、愛と、赦しと、忍耐を持って、わたしたちが悔い改め、御許に行くことを待っていて下さいます。宴会の席を用意して、待っていて下さいます。その恵みに与る者として下さい。

天地を造られ、すべてを支配しておられるあなたの御許で、生きる者として下さい。

わたしたちの救い主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン